

小田原教育

第117号

平成24年10月5日



ツリバナ

小田原には明星ヶ岳・塔の峰・白銀山や星山など、800mから1000mに近い山々があります。そのほとんどはスギやヒノキの人工林ですが、所々で山地ならではの自然が観察できます。

ツリバナは枝から垂れ下がった花や実をつけるのでその名があります。

目 次

巻頭言

「教育力を高めるチームワーク」

小田原市教育研究所所長 佐久間 秀樹 …………… 2

1 小さなころみ

「改訂 小学校社会科副読本『わたしたちの小田原』」

小学校社会科副読本に関する研究員 長山 武司 …………… 3

2 ある教室から

「『わからない』を受け入れる」

教育指導課指導主事 大須賀 剛 …………… 4

3 研究所だより①～③

教育指導課専門監 秋山 和美 …………… 5

教育指導課指導主事 石井 美佐子

大須賀 剛

教育力を高めるチームワーク

小田原市教育研究所所長

佐久間 秀樹



2012年の夏は、ロンドンオリンピックから多くの感動をもらう夏となりました。

その中で特に印象に残ったのは、団体競技における日本の選手の活躍です。初めてメダルに届いた競技、初めて入賞した競技、そして女子バレーボールなど、何年かぶりにメダルに輝いた競技もいくつかありました。

その理由としては、選手間の意識や連帯の強さがまず挙げられますが、他にもスタッフによる相手チームの徹底分析、運動生理学に基づいた科学的な練習メニュー、国民や地域の人々の応援による精神的な後押しなども考えられます。

選手のインタビューの中で、「自分たちだけの力でなく、多くの人の力をもらって結果を残すことができました」との言葉が多かったのも印象的でした。

今、教育の分野では、新しい教育課程のもとでの実践が動き出しています。また、学力や不登校、いじめの問題など、みんなで知恵を出し合って改善すべき様々な課題もあります。

そのような中で、諸課題について職員間で共通認識をもち、その課題解決のために教職集団というチームで、さらに、学年や課題別のチームで力を出し合って取り組んでいくことが、より一層大切になっていると思います。

現在、教職員の年齢層はだいぶ若くなってきています。若手の新しいものに取り組むエネルギーとベテランの長年積み重ねられてきた経験がお互いに影響し合い、そして、それぞれの良さを出し合って、課題解決のためにより大きな力を発揮することが期待されます。

また、年齢や経験年数だけでなく、一人ひとりの特性や個性を生かしていくことも大切です。ITに堪能な教師、コミュニケーションをとるのが上手な教師、教材分析に優れた



教師など、それぞれ特徴があることと思います。その多様性、個性を認めながらお互いに専門性を磨いていく姿勢が今望まれています。

「学びの共同体」を提唱する佐藤学氏は、「教師が専門家として育ち合う『同僚性』の構築が学校改革の中軸になる」と述べています。

さらに、指導については教師の専門分野ですが、その指導に関わる理論や教材内容については、多くの専門家がいることと思います。その専門分野の人材や機関とも連携して実践に取り組むことが目標の実現、課題の改善につながるものと思います。総合的な学習における人材活用や不登校に関わる「ケース会議」などはその1例であると言えるでしょう。

また、最近「不易流行」の言葉がよく使われていますが、教育の本質を押さえつつ、時代の変化に対応するためには、その変化を適切に見極める必要があり、そのための指導内容や教材の精選が必要です。さらに、指導においても、多様な考え方を引き出し、それを認めていくための指導法や指導形態が望まれます。

教育研究所でも、共同研究やプロジェクト研究の中で新しい指導のあり方や指導内容、指導教材等を研究しております。今後、その研究の成果をまとめ、その成果を各学校や園にお伝えし、生かしていただけるよう努力してまいります。各学校や園におかれましても、新しい指導のあり方を多くの分野の組織と連携しながら、チームワークの力で創意工夫していかれることを願っております。



改訂 小学校社会科副読本『わたしたちの小田原』

小学校社会科副読本に関する研究員

横山 聡（下府中小） 納 今日子（酒匂小）
長山 武司（東富水小） 星野 真吾（曾我小）
小林あゆみ（下曾我中） 松井香織（富士見小）



1 はじめに

第3学年及び第4学年の社会科は、「地域学習」ともいわれます。その中で社会科副読本は、子どもたちが住んでいる地域について、そこにある事物・事象を対象にして問題を追究することを通して、学習指導要領のねらいや目標を達成する役割を担っています。今回の学習指導要領の改訂に伴って、現行の副読本が目標や内容に沿っているかを検討・見直しをし、23・24年度で副読本「わたしたちの小田原」を改訂することを目的として、研究がスタートしました。

2 研究の内容及び活動状況

新学習指導要領のねらいや単元の目標を達成できること、小田原のよさや特徴を最大限取り入れることなどを意識して項目を立て、取材活動に取り組んできました。その一部を紹介します。

「魚をとる仕事」では、岸から急に深くなっている小田原の海の特徴を生かした漁業「定置網漁」について大きく取り上げたいと思っています。朝4時に市場に行き、とれた魚やセリの様子などを観察し、漁師さんからもお話を伺いました。「みかんづくりの仕事」では、早川のみかん農家の方に取材し、太陽の光がよくあたる早川の地形が、みかんづくりに適しているという「適地適作の大切さ」について教えていただきました。「商店の仕事」では、平成20年にオープンした「朝ドレファ〜ミ♪」についてもふれ、地産地消をめざすとともに、生産者と消費者を直接結ぶという新しい形のお店を紹介します。農家とのメールの利用や、新鮮さや安心安全を意識したお店の工夫について伺ってきました。「安全を守る工夫」では、小田原市総合防災訓練にも参加してきました。炊き出しやトイレ設置の様子、体育館での宿泊訓練などを取材し、関



係機関の連携について理解するとともに、「自分のまちは自分で守る」という意識づけも大切にしたいと改めて感じました。「用水を引く」では、荻窪用水について、取り入れ口である箱根湯本から用水に沿って荻窪・早川まで歩きました。専門家にもお願いして旧水路をたどり、手掘りの隧道の中では当時の人が明かりを灯すために作ったろうそく台の跡なども見つけることができました。当時の工事の様子を想像することができます。

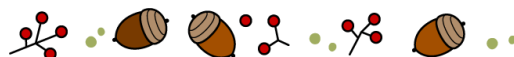
このように、昔から受け継がれてきた不易の部分、新しく変化していく流行の部分を確認し取材してきました。また、その仕事に直接携わっている人と接し、思いや願いなどについて生の声を聞くことができました。

3 おわりに

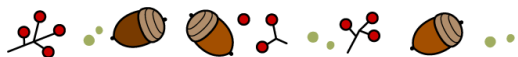
今後は引き続き取材活動を続けながらも、執筆活動に重点が移っていきます。子どもたちが見やすく、興味・関心をひくように写真を多くし、問題解決学習の一助となるように吹き出しやコラム欄なども工夫する予定です。また、お店や工場など、働いている人の姿を入れ、働いている人の工夫や努力、願いや思いを盛り込んでいきます。

自分たちの生活がいろいろな人に支えられていることに気づき、子どもたち自身が市民として将来の小田原を創っていくことを意識できるように、「このまちのこんなところが好きだな。」「このまちがこんなふうになったらいいな。そのために自分にできることは何だろう。」というように、ふるさと「小田原」の問題を自分の問題として捉え、何とかしようと前向きに考え取り組める子が育っていくことを願い、社会科副読本の作成を進めていきます。

（文責 長山）



「わからないを受け入れる」



教育指導課指導主事 大須賀 剛

「何か“もやっと”しているんだけど」
友だちの説明を聞いていた子がつぶやきました。すると、

「“もやっと”ってどういうこと？」

「何で0（零）をつける必要があるのか」

「ああ～」

という多くの声。小学校5年生の算数「小数のわり算」で、あまりが小数になる計算について考えている一場面ですが、つぶやいた“もやっと”の意味を子どもたちみんなで探り、共有しようとしています。その後、友だちの「わからない」ことを当たり前のように受け入れた子どもたちは、その説明をしようと試みています。友だちの説明を聞いて漠然とでもわかった子は、今度は説明側にまわります。すると、実はまだ理解できていなかったことに気づいたり、反対に説明しながらより確実な理解をしていったりしているようです。

ふと、学級掲示に目を移すと、目標に『学び合う』という文言が掲げられています。“もやっと”のように、お互いの微妙な表現を自分の問題として捉えようとする姿、つまり、学び合いの前提として、まずは、友だちを受け入れることを大事にしているのでしょう。『ここまで考えたけど・・・』『どういう意味なのか・・・』といった『わからない』ことを伝えてくれる子のおかげ「その友だちに関わろうとした場面を見逃さず価値づける」という担任の先生の話からも、教師がどこをみて授業に臨んでいるかがわかります。

「Tさん、Mさんの言ったことがとても大事なので、もう一度自分の言葉で言ってください」

時に、教室に緊張が走ります。友だちを受け入れるということを軸にしていることが声かけにもつながっています。積小為大。教師の声かけひとつかもしれませんが、子どもたちの学び合う姿が育まれていくヒントをみたような気がします。

「だって0.4にしないと検算の答えが合わないでしょ」「あれ…検算って何だっけ」

「ここにあるように $7 \div 3 = 2$ あまり1だから検算すると・・・」

子どもの躰きを予測して、単元のレディネス調査で使った検算の問題がポイントとして掲示されていました。これを指し示しながら説明するので、友だちの話に対して、子どもたちはより一層見入っています。

「つまりこの4は0.1、0.1、0.1、0.1だよ」

「ほら、この2.5は0.1が25ってことでしょ」

「ああ～」

「だから0（零）をつけて0.4にするんだ」
そこには、満面の笑みで頷きながら声を出す子どもたちの姿がありました。一見大人から見ると、「この言い方で伝わっているのだろうか」と思うことがあります。しかし、ぐっと待つことで、子どもたちがそれぞれの言葉で理解し合っていることがみえてきます。いわゆる『子ども語』の最大の理解者は学級の子どもたちです。

行きつ戻りつ、着実に一人一人の深まりを感じる時間でした。教師の手立てを含めて、安心できる環境であるからこそ、気兼ねなく仲間と相談し話し合う。友だちとのやりとりは一人一人が思考するための手がかりとなっている。まさに、集団で学ぶ意義がここにありました。



100年目の転換：日本の教育への提言

～平成24年度教育講演会～



8月23日(木)、小田原市、足柄下郡の幼稚園、小・中学校の教職員のみなさんを対象に、教育講演会を開催しました。今年度は、東京大学名誉教授の月尾嘉男先生をお迎えし、「百年目の転換～日本の教育への提言～」という演題で、約2時間のご講演をいただきました。月尾教授の豊富なデータや情報、様々な分野での豊かな経験に基づく鋭い分析力、穏やかな語りの中に熱い想いを感じられた講演の一部をまとめました。

世界の中で沈没する日本

国内総生産 PPP	19 位
政府長期債務残高	55 位
経済成長（マイナス）	53 位
貿易収支（マイナス）	29 位
国際観光収入	54 位
生活費用(東京)130 以上	55 位
＜ニューヨークを 100 として＞	
携帯電話料金	55 位
工業用電力料	51 位
国際競争力	23 位

落日の日本

崩壊する地域 血縁社会から無縁社会へ

地域主権への転換

日本は、明治維新以降、学校建築・教材・教育手法・服装(制服)・言語(共通語)等の統一をはかり、教育を画一化してきた。その結果、世界の様々な分野で連戦連勝しトップクラスとなった。ところが、現在の日本は先頭から乖離している。これからは、一様な社会ではなく、多様な社会へと転換をはかる必要がある。

目指すべきは、地域主権への転換である。

他国の人々が認めてきた 日本の素晴らしさ

- ・日本建築（桂離宮等）
- ・写楽（作品は海外に多数流出）
- ・「理想の食卓は元禄時代以前の食卓である」としたアメリカ
- ・世界農業遺産に認定
佐渡一トキのすむ里山
能登半島—里山・里海 等

資産は地域にある。

もっと目を向けていきたい。

- ・温泉、野菜、景色、食材
- ・自然＝神として結びつけてきた。

神社の周辺を、奥山（神がすむところ）、里山・里川・里海（人が住んでよい）とすることで、自然を維持し、固有種を含む日本の多様な生物が生存してきた。

歴史から学び、国を大切にする気持ちをもちながら、自分たちで何とかしようとする子どもたちを育てたい。

「明後日からサハラ砂漠へ行くんだよ。」と言って帰られた月尾

先生。3 日後には、BS-TBS で地球千年紀行～先住民族の叡智に学ぶ～の放映がありました。アマゾン川本流の原点に位置する町・イキトスの郊外で暮らしているボラ族。もともとコロンビアの南部に暮らし現在の土地に追われていったボラ族ですが、今も昔ながらの伝統を守り続けています。近代的な暮らしと古き良き伝統とを両立させながら暮らすボラ族の暮らしを訪ね、現代社会が抱える様々な問題を解決するためのヒントを月尾教授が探っていました。

月尾先生のお話から、日本の現状をしっかりと受け入れ、自分たちの力でできることを行い、次の世代へ大切なものを引き継いでいきたいと感じました。（秋山）



ベネッセ教育研究開発センターが行った小学校の新教育課程に関する調査結果が、この2月に報道発表されました。移行措置期間も含めて「授業についていけない子ども」が増えたとする教師が26%、「児童間の学力格差」が大きくなったとする教師が40%もいるという、今回の調査の結果から、新教育課程の実施にあたり、様々な課題が生じていることがわかってきました。

そこで今号では、学力向上のポイントとなる「カリキュラム・マネジメント」を学校でどのように進めていくか、高階玲治先生（教育創造研究センター所長）の緊急提案（平成24年3月29日付の教育新聞に掲載）をもとに、お伝えしたいと思います。

今回の調査の実施は平成23年の6月から7月にかけてのものです。その時点ですでに年間計画から国語が4割、算数は3割の教員が「遅れが出ている」と回答しています。

なぜ、このような事態になったかといえば、教科書と関連があると考えられます。新しい教科書が教員にわたるのは4月当初。小学校の場合はほぼ全教科を担当が受け持つので、4月にすべての教科書を精査し、自校に適合した年間計画を作成することになりますが、実際は極めて困難な作業となります。

そこで、従来のように教科書会社が提示する年間指導計画を利用することになりますが、どの教科書会社も、厚くなった教科書のすべての内容を年間計画に組み込んでいます。さらに教師は「教科書はすべて教える」とする思いが強いので、従来のやり方で新しい教科書を受け止めます。こうして、年間指導計画に遅れが生じていくと考えられます。

進度に遅れが出た場合、それを取り返すために、「重点を置く単元を設ける」と回答した教員は、国語が6割であったのに対し、他の教科は3割前後となっています。

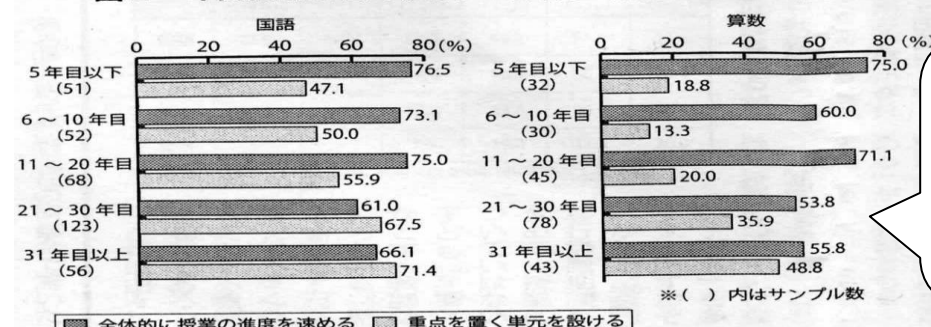
一方で「進度を速める」という回答は4教科（国・社・算・理）とも6～7割となっています。「進度を速める」ことは、「授業についていけない子ども」を多く生み出すおそれがあり、このことが今大きな課題となっているのです。

一般的にみて、学校では、年間指導計画の作成や授業の実施は担任や教科担任に任せられますが、授業を充実したくてもそこに注力する余裕がないのが最近の学校の状況でもあります。時間的にも、指導力の点でも余裕がない状態の中で授業を展開する。そのような状況が「授業についていけない子」の増加や「児童間の学力格差」の拡大につながっているとも言えそうです。

そのような状況の中で、子どもの学力を保障するために、カリキュラム・マネジメントの一層の充実が求められています。

どうすれば充実したカリキュラム・マネジメントが可能になるのでしょうか。高階先生からの提案をご紹介します。

図2 年間指導計画の遅れへの対応（教職経験年数別）



経験年数が少ない教員の方が、全体的に進度を速める傾向が見られます。



今こそ進めよう、カリキュラム・マネジメント！

- ① 年度初めに年間指導計画作成する段階では、一応教科書会社のカリキュラムを参考にします。ただし、それをすべて受容すれば授業時間がオーバーすることは確かなので、取舍選択しながら単元や教材の重点化を積極的に進めます。
- ② その前提は校内の共通認識にあります。年度の経営重点として教育課程経営の方針を明確化して共通認識を全教職員が持つことが重要です。重点化にあたっては、経験の豊かな教員の考え方を参考にしながら、チームで取り組んでいくことです。「進度を速める」ことで学習内容の「落ちこぼし」をつくらないことを徹底する必要があります。
- ③ 次に年間指導計画のみを頼りにせず、実際にカリキュラムを実施する場合は、単元や題材ごとに「内容」「方法」を吟味し、「ねらい」に基づく学習活動を考えていきます。教材研究の時間が不足している中ではありますが、教師は努力して教材吟味の力量を高める必要があります。結局は単元レベルが日常の学力形成につながっていきます。
- ④ 授業は「習得」と「活用」のバランスを重視します。ただし、学級の学力構造によっては「習得」の時間を多くしたり、宿題の与え方を工夫したり、放課後の時間を活用した補充学習を取り入れたりする必要があるでしょう。
- ⑤ 教科書研究を行い、どのような内容が提示されているのかを調査します。例えば「習得」型の教材と「活用」型の教材などがあります。例えば遅れがちな子には「習得型」の教材により、学習内容の定着を心がけ、理解の速い子には「活用法」の教材や発展の学習を積極的にとり入れるなど、柔軟に対応していくことが求められています。
- ⑥ 学年内のコミュニケーションを重視し、遅れの要因などについて話し合い、対策をとるに考えます。学年内で相互啓発し合うことで、進度を調整したり、指導の効率などについて学び合ったりすることが必要で、学級担任任せにしない取り組みを大切にしたいです。

学力向上に関する提案を、様々な方から伺う機会が増えました。社会や私個人の関心が高まっていることの表れだと思います。提案の具体的な内容はそれぞれですが、共通していたのは「担任まかせにしない、組織（チーム）で取り組む」ということだと、今、改めて振り返っています。一人一人の教員としての力量を高めることがチームとしての組織力を高めることにつながり、同時に、集団の力を高めることで個の力も高まっていきます。

互いの力を高め合う場が校内研究であり、校内で進める OJT の場の一つでもあるかと思います。教育研究所では、研究や研修、情報の提供等により、そうした先生方の取り組みをサポートしていきたいと思っています。（石井）

学校独自による情報の発信

～これからの「教育ネットワーク」に向けて～

「電話連絡網を使っているが、不在やつながら多いことが多く、情報が伝わっているか心配」

東日本大震災を契機に、情報を速く正しく伝えることの大切さが改めて問われています。市内に目を移すと、独自に保護者へ情報を発信している学校もあります。そこで、無料緊急連絡網ツール「まちCOMI」を使い、現在、学校からの情報を発信している学校視聴覚研究会の会長森戸義久校長先生（東富水小学校）に話を伺いました。



Q 緊急連絡網ツールとはどのようなものですか。

A 小田原市のホームページから登録できる「安全・安心メール」と原理は同じです。保護者が「まちCOMI」にある東富水小学校の登録用メールアドレスに登録することで、学校からの情報が携帯電話のメールに届くようになります。

Q 導入時や導入後の苦労はありますか。

A 導入はホームページの案内通りです。また、保護者には「携帯メール配信システムへのご登録について」というお知らせを配付し、希望する保護者が自ら、該当する学年に登録することになります。

ただし、不具合対応やメンテナンスに多くの時間を費やしています。「メールが届かない」といった問い合わせが学校にありますので、管理画面から状況を確認して対処する必要があります。

Q 反対にどんなことが便利ですか。

A 学校独自に情報を発信できることです。インターネットがつながる環境であれば発信できるので、パソコンやスマートフォン・携帯電話からも情報の発信ができます。

Q 保護者の登録の割合や他の連絡手段の使い分けをどうしていますか。

A 本年度で約65%の保護者が登録していますが、逆に35%の保護者が登録していないということを大事にしなければなりません。台風や災害、不審者情報等の緊急性のある事柄は、メール配信と緊急電話連絡網を両方使用し、必要に応じてプリント配布しています。携帯電話を所持しない保護者や登録されない保護者もいらっしゃるので、電話連絡網も引き続き大切です。

活用事例～いくつかの学校にも聞いてみました～

子どもの迎への依頼

引き取り訓練や悪天候に伴う連絡など、保護者へ子ども達の迎えを依頼する際に活用しています。緊急連絡網とあわせて、複数ルートで情報発信をすることで、より迅速に情報が伝わります。また、文字情報により正しく情報が伝わるというよさもあります。

プールの中止連絡

夏期休業中「プール開放」で中止の連絡に使いました。学校まで距離のあるご家庭からは、「プールまで旗を見に行く必要がなくて助かった」という声もいただいています。

修学旅行等の様子を知らせる

修学旅行や宿泊学習などの「宿泊」を伴う行事では、数時間ごとに子ども達の様子を配信しています。メール配信が保護者自身の安心につながるようで感謝の連絡もあります。保護者の間でも、配信された画像を通して会話が盛り上がるようです。

学級対抗バスケットボール大会の得点経過

学年主任も配信の管理者権限をもっているため、学年のイベントである学級対抗バスケットボール大会で試合結果や得点経過までリアルタイムに配信していました。保護者が次々に応援にかけつけ、会場全体がとても盛り上がったようです。

このように、運用を工夫することで大きな効果も期待できます。東日本大震災では、実際に携帯メールが保護者に届いたのは深夜だったようですが、情報伝達の経路を“複数”備えておくことの大切さも学びました。教育研究所でも、学校独自に情報発信ができる仕組みは必要であると考えています。全校への導入、現在メール配信を行っている学校で多くの時間を費やしている不具合対応、管理者権限の範囲をどうするかなど課題も少なくありませんが、今後の教育ネットワークシステム更新時に導入されるよう、しっかりと声を届けたいと思います。（大須賀）

小田原教育 第117号
発行日 平成24年10月5日（金）
発行所 小田原市教育研究所
発行者 所長 佐久間 秀樹
〒250-8555 小田原市荻窪 300
電話 33-1730
http://www.ed.city.odawara.kanagawa.jp/kyouiku_ken/index.html